

ドイツの森林率と土地利用変化に関する新資料

石井 寛

はじめに

森林率と土地利用がどのように変化してきたか、は森林問題を考える場合の基礎的な情報である。これまで森林率と土地利用変化に関する研究は主として森林史や農業史を専門とする研究者によって行われてきた。しかし 1980 年代以降の環境問題への関心の高まりから、新たに地理学や環境科学を専門とする研究者による研究が行われるようになり、地域・集落、市町村レベルの情報とともに全国的レベルの情報が 1990 年代以降に蓄積されてきている。本稿ではドイツについて森林率と土地利用変化に関する新たな研究成果を紹介し、皆さんの参考に供したいと思う。

Mantel 教授の見解

1974 年にフライブルク大学の林政学教授として退職し、1982 年に死亡した Kurt Mantel 教授は森林史に関心が高く、多くの業績をあげてきた。1990 年にはそれまでの研究成果をまとめた「Wald und Forst in der Geschichte」が彼の弟子達によって出版されている。

その著書によれば、「ドイツの初めは 4 分の3が森林によって覆われていた。1300 年までの開墾時代の後、森林の割合は 4 分の1まで減少した。1400 年以降はほぼ森林面積は変化せず、開墾もあまり進まなかった。19 世紀中頃からは一方で開墾、他方で造林の実行という相反する動きがみられた」（上述書71頁）としている。この見解は多くの人に支持されており、民族学者のレーマン教授は最近の著書で、「過去 600 年間ドイツでは居住地域に対する森の面積は変化しない」（レーマン、識名、大淵訳「森のフオークロア」、2005 年、日本語への序文 13 頁）としている。

環境学者の共同研究の成果

環境学者のBorkらは共同研究を行い、その成果を「Landschaftsentwicklung in Mitteleuropa」として1998年にまとめて発表した。その成果によると、ドイツの森林率等は次の通りである。

	森林率	耕地率	緑地率	注
650-659年	90%	5%	3%	
1000-1009	65	20	13	
1310-1319	15	55	27	15%まで下がっていることに注意
1420-1429	45	28	24	45%まで上がっていることに注意
1650-1659	32	32	33	
1780-1789	30	39	27	
1870-1879	27	40	28	27%が近代の最低森林率
1961-1990	30	38	24	

連絡先: 石井 寛、ishi-ebetsu-069@mub.biglobe.ne.jp